

本論文は

世界経済評論 2024年3/4月号

(2024年3月発行)

掲載の記事です



世界経済評論

定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料

OFF

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読
期間中

デジタル版バックナンバー読み放題!!



世界経済評論 定期購読



0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp
雑誌のオンライン書店

ふくろうは妻の母の友

Jennifer Ackerman の本『What an Owl Knows (ふくろうが知っていること)』は、その序文で、「ふくろうは3万年遡るフランスの Chauvet Cave の絵画や古代エジプト人の象形文字に現れ、ギリシャ神話にも出て来る、と述べる。

四足動物の中に独り

Chauvet Cave は1994年末フランスの南東部 Ardèche 峡谷に見つかった洞窟である。石灰岩の崖の一部の割れ目から空気が噴き上がっているため、Jean-Marie Chauvet など洞窟専門家がその狭い穴から降り下がった。すると大きな洞窟がひろがり、壁に、ついさっき描いたように、馬、ライオン、大牛 (auroch)、毛深い犀などの絵が浮き上がった。それがあまりに新鮮だったので、本物かどうか疑ったという。

その後の綿密な調査によると、壁画に描かれた動物はハイエナ、バイソン、大鹿 (Megaloceros) なども含んでおり、個々に数えると430余、種類では少なくとも13になった。そうした中にふくろうがあった。

ほくはたまたまこの洞窟については、1996年出版の英訳の大判の本を買って持っているが、The Rock Art: The Chauvet Cave, Ice Age Paleolithic Cave Paintings というインターネット公式サイトには対象になる動物とその絵のかなりの詳しい説明があるので、ふくろうを見ると、絵そのものは背丈45センチ、首あるいは肩から以下に十数の白い縦線が入っている。

この Long-eared Owl——アッカマンは Eurasian Eagle Owl かもしれないという——が「変わっている点は、頭がこちらを向きながら身体は背をこちらに向けていることだ。これはこの鳥の、頭を180度回できるという、多くの文化ではふくろうの超自然力と見做されている特異な能力

を初めて示したものかもしれない」という。

しかも、このふくろうは洞窟の最初の部屋の次の、壁画のまったくない部屋の次の部屋に描かれている。「これは、人がいちばん深い部屋からもどって見返すとこの鳥が最も深い部分から見ている、暗闇でも見通す非人間的能力をもっていることを示しているのだろうか」という。この部分はアッカマンも引いている。

別に、この洞窟を詳しく探索したフランスの先史時代専門家 Jean Clottes によると、長く広がる部分が250メートル、面積8500平方メートルに達する。しかし、その壁画の多さにもかかわらず人間が住んだことはなく、絵を描くためになんらかの儀式や崇拜に用いられたらしい。されば、ふくろうは、その他の動物と同じく、「単なる興味や審美的喜びのためではなく、それらの魂を呼び、助けを求める」ためだったろうという。

ちなみに、これら壁画に描かれている動物のいくつかりかは死滅している。ライオンは cave lion または steppe lion と呼ばれる種類で、現在のアフリカのライオンを一回り大きく、どちらかといえば虎に近かったが、1万3000年ほど前に絶滅した。大牛 (auroch) は背丈6尺 (180センチ) に達し17世紀まで存続していたが、死に絶えた。また、大鹿 (Megaloceros) は Irish Elk とも知られているが7700年ほど前に死滅した。これは「カナダ雁は侵入物か」(本誌2022年5/6月号)で述べた。

これら洞窟壁画から1万5000年から2万年経って、後にマグダレーヌ文化 (Magdalenian culture) と呼ばれる時代になると、白ふくろう (Snowy Owl) を神秘的な目的に用いた、とアッカマンは言う。この文化は今のフランスの西からポーランドまでの地域、及び今のイタリアに栄えたが、フ



佐藤 紘彰

ランスのある洞窟には白ふくろうの翼の骨が100個ほど、別の洞窟には白ふくろうの体の骨が22個見つかり、いくつかの骨には彫り物があった。

また、もう一つの洞窟には「ふくろう画廊」ともいうべきものがあり、そこでは番いの白ふくろうが向かい合い、その間に若いふくろうが描いてある。これらが何を意味するのかは解釈が分かれるが、白ふくろうが大切な役を果たすようになったことは想像されるという。

銀貨の両面

ギリシャ神話になると、片面に兜をつけた戦争の女神アテナ、もう一面に「知恵の象徴」たる Little Owl を掘り込んだ銀貨が現れる。この有名な銀貨は少なくとも紀元前510年から400年ほど鑄造された。古代ギリシャ歴史家フィラコスによれば、うち大銀貨は Little Owl とも呼ばれたという。この鳥は後に学名 *Athene noctua* (夜のアテナ) を得た。日本ではコキンメフクロウ (小金目鼻) と訳されているらしい。

また、Brygos Painter が紀元前490-480年に描いたとされる有名なアテナの図では小さなふくろうが女神の右肩にとまろうとしている。

ギリシャ神話に関わるイギリスの詩人／作家 Robert Graves の名著『The Greek Myths (ギリシャ神話)』を見ると、アテナは笛や壺や日常の生活必需品を発明したほか、軍神でありながら戦争は喜ばず、一旦戦争となれば戦争停止を求める等々、喜ばしい特性を並べているが、このゼウスの唯一の子(娘)の描写では、ふくろうは鳥とならべて一度だけ触れる。

神話にかかわるもう一つの名著、Edith Hamilton の『Mythology: Timeless tales of Gods and Heroes (神話：時空を超えた神や英雄たち)』では、ギリシャの首都アテネは「この女神の特別の都市、オリーブはこの神が作ったもの、ふくろうはこの神の鳥」とする。

他方、アテナの肩書き或いは枕詞のインター

ネットのリスト Athena The Epithets を見ると、無数な中に *γλαυκώπις* (glaukóhpis) があって、「ふくろう (glaf) / 月 (glafkóh) のような目を持つ」という解釈とともに、「オリーブや海のよう

に灰青色」と添えてある。なるほど Richard Lattimore はその英訳 *The Iliad of Homer* で、この枕詞がアテナに用いられている最初の 1.206 をみると、the goddess grey-eyed Athene とする。

現在ギリシャに生息するふくろうのリストは8種を示す。これらふくろうはギリシャを超えた地域にも住み、なかには生息地がロシア大陸の東端にも及ぶものもある。そのうち Little Owl がアテナとの関係が深いのはこの都市で特に多いからという説明もある。

妻の母とふくろう

こう書いていて、妻の母 Florence Mitchell がふくろうに興味をもっていたことを思い出す。看護婦だったフローレンスは聾啞の医学生 Lewis James Rossiter と結婚、ルイスはまもなく外科医師になったが、二人は、1980年、長年住んだイリノイ州南部 Carbondale の家を捨てて、ミシシッピ河を超えたミズーリ州の古い町 Cape Girardeau に引っ越した。退職者たち向けビルのアパートを買ったのだ。

ルイスは五年後に亡くなったが、フローレンスは後に木の幹に一刀彫りでふくろうを作らせてビルに寄贈、木彫りのふくろうは庭の真ん中に置かれた。町に住むそういう木彫りをやる人がいたのということだったが、なぜふくろうを選んだのかは尋ねないままに、百歳になる一か月前に亡くなった。

亡くなると、フローレンスのフクロウの置物の収集が見つかった。そのなかから妻が選んだ四つほどほくらのアパートに飾ってある。その一つは切り取った小さな木片にとまる小さなふくろうで、なんとなく軍神・智者アテナの友 Little Owl を思わせる。

さとう ひろあき 翻訳家、コラムニスト在NY